書評

諏訪部浩一著
『ウィリアム・フォークナーの詩学：1930-1936』

（松柏社、2008年）

中　野　学　而

「処女のまま死ぬローザは、フォークナーのポリフォニックな詩学を代表する、彼が創造した女性人物の中でおそらく最も成熟したキャラクターなのである」（450頁）――この提言に終わる「三人のローザ」論を筆頭に従来の解釈を刷新する視座を数多く提供するこの著作においては、タイトルからも明らかなようにバフチン的「ダイアローグ」がひとつのキーワードとなる。そもそもの書物の構成からしてダイアローグ的というか、その大きな理論的枠組みが堅固であるゆえに分かりやすく、議論のポイントを部ごとにまとめつつ読ませる構成も便利で、要するに読者へ大きく開かれたものとなっているのだ。先行研究に対する目配りも網羅的であり、これからのフォークナー研究における一つの重要な参照点となることは間違いないだろう。だが、この野心的な著作の射程はそこにとどまらない。現在日本で（英米）文学を研究するもの一般に対し、その研究の「足場」そのものの孕む様々な根本的問題を本書は突きつけるのである。

著者は「あとがき」において、「文化研究に文学研究は包摂されえないはずだ」（493頁）との思いで本書を書いたと述べる。まさにその「包摂」のプロセスのただ中にあるのが昨今の「文学研究」をめぐる現状であってみれば、ちょうど本書における『響きと怒り』に対する『アブサロム、アブサロム！』の関係のように、本書には、「文化研究」的アプローチが隆盛を誇るアカデミズムの現状に対する（自己）批判的／撹乱的な力たらんとする「文学研究」の並々ならぬ意欲が込められていることが思いなされるのだが、著者はさらに、本書は「英米文学研究のアカデミズム的なもの」と「日本における文芸批評的なもの」とを「接合」する試みであって、それが「日本人にしか書けないもの」になっていて欲しいと考えている、とも言う（493頁）。著者の見立てでは、つまりそれらの二つの言説の間には溝があり、それを埋めることができるのは日本人だけであって、したがってそのような意味で日本人にしか書けないようなものをこそ書かなければいけない、というのである。

その500点を超す引用の織りなす論述の網の目の精巧さに、なかなか一読したところでは件の「接合」の意味するところが分かったようで良く分からないという向きもあろう。著者の言う「英米の文学研究のアカデミズム的なもの」と「日本の文芸批評的なるもの」とは何か。また、それらを「接合する」とは、具体的にどのような言説空間を生み出すことを意味するのか。この疑問に本格的に答えることは評者の手に余るが、少なくともそれは、フォークナー研究の現場において常に参照されることになる（主に）英米のさまざまなフォークナー研究者ならびにラカン、ジジェクやドゥルーズなどの欧米の思想家の知見と、大橋健三郎や平石貴樹、あるいは柄谷行人や浅田彰など日本のフォークネリアンや思

想家たちの議論とを折衷的に同時援用しつつ議論を進める、というような表層的な水準での「日・英米の接合」のみを意味するものではありえまい（むろんこれも大事な「接合」ではあるのだが）。

冒頭でも述べたように、本書はバフチンの『ドストエフスキーの詩学』にその重要な理論的足場のひとつを置くので、「小説」においては登場人物達の多様な声が弁証法的に混じり合うことなく共存しつつ対話を繰り返し、そのどれかひとつが特権的な声／メッセージとなるようなことがない「ポリフォニック」な構造こそがそこで描かれる世界のリアルさを保証する、そしてそのリアリティを読み解くことが「批評」の役目である、と前提する。本書の文脈では、それは必然的に、「小説」を批評するにあたって、様々なキャラクター（それは「語り手」や、場合によっては「作者」も含む）達がそれぞれコンスタティヴ／パフォーマティヴに発する強い政治的メッセージ――主としてそれは「父権制／人種主義／性差別主義／階級主義（批判）」のかたちをとることになる――を抽出しつつも、最終的にはそれらを全て均等の価値を持つものとしていったんカッコに入れて扱う姿勢へと連なることになるだろう。

個々の精緻なキャラクター・アナリシスの説得力、先行研究への目配りの充実など、本書はこれまでに書かれたいくつかの評も示す通り卓抜なものである。しかしそれを真に際立つものたらしめているのは、上記のように、欧米のフォークナー研究の達成やジェンダー研究・文化研究の理論的地平を信じ幅広く渉猟することでそれぞれの人物造形にさまざまな政治的メッセージを読みこんでみせつつ、決してそのような主張それ自体を議論の目的地にするのではなく、むしろそれらの知見や現代思想の領域での成果を積極的に援用し、フォークナーの「小説家」としてのふるまいを統括している原理――つまりそれこそが著者の言う「詩学」である――をこそ示そうとするその強靭な意志に他ならない。そもそもバフチン的小説理解が評価され始める以前の昭和初期の日本、やはりドストエフスキーから学んだ「様々なる意匠」の小林秀雄の批評的スタンスがまさにこのようなものであったのだとすれば、著者の言う「英米のアカデミズム的なもの」と「日本の文芸批評的なるもの」の「接合」のイメージの要諦はおそらくそのあたりにあると考えてよいだろう。

「序章」によると、本書の最終目的は、「『アブサロム』を頂点とする中期フォークナーの成長の軌跡を、『響きと怒り』におけるモダニスト的達成への自己批評として捉え」ることである（6 頁）。このため、本書の議論の出発点となる 1929 年出版の『響きと怒り』は、通常理解されてきたようにフォークナーの「最高傑作」のひとつとして祀り上げられるべきものでは決してなく、むしろ「フラッパー」、つまり「男性不安」（7 頁）をあおる「新しい女性」の登場に対する 1920 年代の男性純文学作家達（ヘミングウェイやフィッツジェラルドなど）が一様に示したジェンダー・パフォーマンスのありさまを基本的には共有する（共有してしまっている）作品として考えるべきものである、という主張がなされる。本書はだから著者の言う「最高傑作」としての『アブサロム』の分析こそを主眼とすることとなるのだが、その分析を可能にするのが『響きと怒り』に関するこのようなジェンダー論的・文化論的視点からの卓見なのであり、結果として本書の全体は、フォークナーの「詩学」が、そのような「男性不安」を引き起こす諸々の状況に対する防衛機制としての「パターナリスト的地平」（17 頁）を目指す 1920 年代のもの（これを著者は「ロマンティック」（27 頁）な詩学と呼ぶ）から、そのような「「男らしさ」を温存してしま

うイデオロギー」（24頁）をむしろ脱構築してしまうことを目論むような1930年代のものへと徐々に「成熟」してゆくさまを記述するものとなる。それはそのまま「故郷喪失」（ルカーチ）の現代にあってなお「秩序」の回復（15頁）を目指そうとするモダニズム詩学への批判となるゆえ、たとえばリチャード・C・モアランドの *Faulkner and Modernism* などを髣髴とさせるものともなるが、著者によれば本書で扱われるのは「表象一般の政治学」ではなくあくまでも「小説の政治学」つまり「詩学」である（126－27頁）ゆえ、人種・性・階級についての表象レヴェルでの変化をこそ問題とするために（本書では概して低い評価が与えられている）『アブサロム』以降の作品群を高く評価することになるモアランドなどともここで決定的に問題意識の袂を分かつこととなる。[1)]

本論の第一部では、「社会的関心の深化」というタイトルのもとに、『死の床に横たわりて』『サンクチュアリ』そして『八月の光』の検証を通し、個人的な「母親喪失」の主題に偏執していた1920年代のフォークナーが30年代初頃に「広く深い社会的関心を持つ「小説家」として成長していった」（35頁）過程を、主に女性登場人物が南部の抑圧的な父権制において苦しむ事情を作家自身が「深く自問している様」（47頁）を追いつつ詳述する。だから、たとえば『響きと怒り』の「賭金」（57頁）がもしも専らキャディの「美しさ」にかけられていたとするのならば、『死の床』や『八月の光』のそれはむしろアディ／ジョアナの「醜さ」に、『サンクチュアリ』のそれはテンプルの「混乱」にこそ賭けられており、それらが男性主人公達のモノローグ的かつロマンティックな世界認識を撹乱／挫折せしめ、小説をポリフォニックに鍛え上げてゆく、と論じられる。1930年代のフォークナーはこうして「人種、ジェンダー、階級」についての社会的な意識を深めた結果、1929年の『響きと怒り』のように「女性」の声を消去しつつ「あるべきところ」に全てを美しく収めた世界から徐々に自らの身を引きはがし、むしろ「泥にまみれる」（25頁）決意を固めてゆくのだ。

それを受ける第二部では、「歴史の重み、そして南部悲劇の臨界点」というタイトルのもとで『標識塔』と『アブサロム』が扱われる。まず第四章で、第一部で扱った諸作品が持っていた「メタナラティヴ」（潜在的な主題）としての「旧南部から新南部への時の流れ」が『標識塔』には欠けているゆえに「小説」として弱くなっている、と論じられたあと（327頁）、第五章で、『アブサロム』においてはそのメタナラティヴが「ナラティヴ化」（つまり作品の顕在的な主題そのものとして小説の表舞台に引きずり出されること）されることで、徐々に「深化」していた「ジェンダー、人種、階級」などのフォークナーの社会的問題意識が一層の深みを帯び、その結果チャールズ・ボンという＜他者＞がサトペンやクエンティンといった白人男性キャラクターの「悲劇」を「南部悲劇」として真の「強度」（449頁）とダイナミズムのもとに定着する、と論じられる。

しかし本書の文脈において最も大事なことは、その「南部悲劇」も、それが確立されると同時に、「醜い」が「力強い」キャラクターであるローザ・コールドフィールドという「さらなる＜他者＞」によって転覆／脱構築されてしまう（これが「南部悲劇」が『アブサロム』において「臨界点」を示すということの意味である）のであり、そのような全

[1)] Richard C. Moreland, *Faulkner and Modernism: Rereading and Rewriting* (Madison: University of Wisconsin Press, 1990).

体の様子こそがまさに「ポリフォニックな小説的地平の豊かさ」（449 頁）の証となる、と論じるところにある。冒頭にも述べたように、特にその過程で展開される「三人のローザ」論は本書の白眉であり、ここまでの本書の議論のすべての重みを引き受けつつ、これまでのフォークナー研究においてなされてきた種々の解釈の不十分を鮮やかに指摘しつつ新しい地平へと読者を導く、「醜さの詩学」とでも呼ぶべきものとなっている。

このように、本書の「ジェンダー研究やカルチュラル・スタディーズの興隆後に可能となった視点」（6 頁）は、特定の政治的メッセージを作品から析出することそのものよりも、むしろフォークナーの「詩学」のダイナミクスを説明する目的のもとで俄然鋭い批評力を与えられることとなる。たとえば『死の床に横たわりて』のアディの「葬送行」であれば、おもに「アンスの体現する南部父権社会の抑圧的な象徴秩序への復讐／撹乱／転覆」を体現するものと解釈されるのが常道であるだろうし、事実そこへと至る道筋は本書でも丹念に辿られるのだが、本書はその後すぐさま、まさにそのように議論の「上がり」へ向かおうとする力学（「超越的／ロマンティック」な姿勢）を斥けて「泥にまみれる」ことこそがフォークナーの 1930 年代の「小説」が持つ力なのである、とする。このような文脈において、本書はむしろそのようなアディの振る舞いを、『響きと怒り』や『アブサロム』のコンプソン氏（そして 1920 年代の作者自身）の示す抑圧的な男性原理パフォーマンス（つまり「ロマンティック・アイロニー」）に通ずるものと大胆に解釈してみせるのである。その時この小説の世界は、「母の拒絶」によって最終的に家族共同体からスケープゴート化された次男ダールの「声」とアディの「声」とが拮抗しつつ響き合う、まさに「ポリフォニック」な「小説的空間」とでも言うほかないものとなる。だから、第五章の『アブサロム』論においてもやはり、たとえば過去の批評家たちが、ボンやジム・ボンドなどの黒人男性キャラクター達が白人男性キャラクター達の「影」のようなものとして「他者化」されていることを政治的に批判している点をまず指摘した上で、あくまでも議論の力点は、そのような「黒人の他者化」はむしろフォークナーのポリフォニックな詩学の達成にとっては「欠くことのできないもの」であったに違いない、と積極的な評価を下すことにこそ置かれることにもなるのである（397 頁）。

ロマンティックな独我論に長らく自足していた作家が、いつか、目の前の世界には――あるいは他でもないこの自己の内部にこそ――自己の到底あずかり知れない「醜い」声をあたりにまき散らしてはばからない＜他者＞たちがいくらも存在していることを思い知り、やがてそれまでの「ロマンティックな作家」としての自己の微温的ありようを厳しく脱構築するような「小説家」としての対話的な世界へ参入するに至る――1930 年代のフォークナーの成長の軌跡を描くにあたってこれほど説得力のある説明はまずないだろうと思われるのは、このモデルが、本書も大きく依拠するラカンの定式化したあの有名な人間主体形成のプロセスにそのまま重なるように思われることとも関係がある。したがってこれは決してフォークナー一人に固有の問題ではなく、いわば未熟な「幼児」としての「（ただの）作家」が「小説家」という「主体」へと「成熟」を遂げるために必ず通過しなければならない、「小説家」の主体形成プロセスでもあるのだ。

過去の膨大な研究成果をほぼ総動員した観のある本書の達成をもって、1920 年代末から 1930 年代にかけてのフォークナーの「詩学」のある重要な側面が見事に解明されたことになろう。しかし、作家の軌跡それ自体と作家の軌跡についての説明とを同じレヴェル

で評すことには慎重であるべき一方、「モダニスト」的な認識に留まっていた作家から「小説家」へと変身を遂げるフォークナーの成長過程を詳述する本書の特筆すべき文脈では、その達成が「見事」であればあるほど、それ自体まさに「作家フォークナー」のある時期の相貌が「モダニスト」的に「あるべきところ」に納められてほぼ「象徴化」(395頁)され尽くした（され尽くしてしまった）ということを意味することにもなろう。クロノロジカルな段階的発展を前提とした説明は非常に明解かつ説得力のあるものだが、同時に、力強い理論的説明が常にそうであるように、そこからこぼれる例外的事象をあえて扱わないことによって可能となっている面も当然ある。だからこそ、本書の達成に賛嘆するものには、翻って、フォークナーという巨大な作家のいわゆる「メジャー・ピリオド」には読者／論者の「象徴化」をさらに拒むような不穏な＜他者＞の領域があるに違いない、と強く思いなされることともなる。「醜さの詩学」の「美しさ」――この逆説は、不可避的にそのような思考を誘発する。

もちろん本書でも繰り返して議論されるように、フォークナーの場合は「女性」「黒人」がもっとも一般的な意味での＜他者＞なのだが、人種差別や女性差別などの「差別の言説／行為」に積極的に加担していた旧南部の白人男性達も、フォークナーにとって、あるいは現代の我々にとっては特に、また別の意味で＜他者＞となる典型的な例である。もっぱら「前近代」的世界において生きられた事象を「近（現）代」に生きるものが批評的に取り扱おうとする際には、「近（現）代」特有のイデオロギーのフィルターを通したアプローチ以外ほぼ不可能であり、そうである限りそこに見える「前近代」は実はいつも「近（現）代」の自己投影にしかなりえず、「真の前近代」とでも呼ぶべきものの姿はその境界の向こう側に無限後退して行かざるを得ないからである（「旧南部」の社会経済制度は「前近代」的というよりむしろ単に「近（現）代」の一部なのだが、ここでは紙幅の都合上その「差別」に関する事情のみを指す）。著者によれば、『アブサロム』という小説の主題のひとつは、「いったん境界線が引かれ、境界や領域、あるいは「ドア」といったものができてしまうと、それができる前が本当はどうであったのかを知ることが極めて困難で、ほとんど不可能でさえあるということである」(338頁)。現在のアジア諸国にとっての戦前日本の天皇制イデオロギーに関する事情と似て、現代の欧米文化圏で暮らす人々にとって旧南部の白人男性達の差別／搾取の事実はもちろん「犯罪（的行為）」以外ではありえない一方、フォークナー自身の故郷アメリカ南部――特に旧南部――それ自体においては事情はまったく違った。その人格形成時にはすでに20世紀に突入していたフォークナーにとって、南北戦争前の奴隷制時代を「積極的な差別の加害者」として生きた自らの曾祖父や祖父あるいはサトペンのようなキャラクターは、単に時間的に前にいたというだけではない、ある決定的な認識論的「境界線」（「ドア」）の向こう側で、いつまでもそのような＜他者＞としての生のにおいを漂わせる不可解な人物として存在していたはずである。現代の政治的感性のうちに生きる我々にとってはなおさらだろう。

そのような文脈では、「英米文学研究のアカデミズム的なものと日本における文芸批評的なもの」とを「接合」するという本書の果敢な試みは、そのいっぽうで両者の「あいだ」の領域を暗黙裡に照射しつつ、いわば「現在の英米の（そしてそれを範とする現在の日本の）文学研究のアカデミズム」それ自体にとっての「思考不可能な＜他者＞」を思考する可能性をも読者に開くことになる。著者が、雪に閉ざされたバッファローのアパートの部

屋で「八十年にわたって蓄積されたフォークナー研究の成果」と「対話」することを通じて「ある特定の時代に生きる日本人としてしか読むことも書くこともできないと、あらためて思い知らされた」（493 頁）と書くとき、その「特定の時代」の「日本人」の精神の地層はどういう構造をなしているのか。2005 年出版の後藤和彦の『敗北と文学』がそのような問題意識のもとに日本とアメリカ南部の文学の「あいだ」を正面から論ずるものだとすれば、本書と同じく 2008 年出版の藤平育子の『フォークナーのアメリカ幻想』や翌年 2009 年出版のジョン・T・マシューズの*William Faulkner*などの著作は、「グローバル・コロニアリズム」と呼ぶべき世界的な視野からのフォークナーの読み直しを提唱する。[2] もっぱら「詩学」の観点からフォークナーの読み解きを行おうとする本書の達成も、それらの著作ともまた異なる視点から、欧米圏全体にとっての＜他者＞の声がますます大きく――あるものにとっては当然「醜く」――なりつつある 2001 年 9 月 11 日以降の世界におけるありうべき「文学研究」のひとつの未来像を強く示唆するだろう。

---

[2] 後藤和彦『敗北と文学』（松柏社、2005 年）；藤平育子『フォークナーのアメリカ幻想』（研究社、2008 年）；John T. Matthews, *William Faulkner: Seeing Through the South* (Malden: Wiley-Blackwell, 2009)。